

ミャンマー難民キャンプを訪ねて

この夏私は、インド旅行の帰途短期間ではありましたが、ミャンマー難民キャンプを訪問する機会に恵まれました。ダッカからコクスバザール往復、ダッカからカルカッタへ戻る飛行機の切符は簡単に取れたのですが、カルカッタからダッカ行きは半月前からキャンセルまちで、出発当日も99%駄目と言われました。空港カウンターでは、"We have no seats."を連発されましたが、私としてはどうしても行きたかったし、進退極まってその場で立ち尽くすこと5分...すると係員が、"You can go. Smile! Smile!"と言うのです。こうして私は、8月13日午前2時ダッカ空港着。JOCVダッカ駐在員の荒木氏に出迎えて頂き、同日コクスバザールへ行くことができました。

津曲先生が急遽手配してくださったお陰で、コクスバザール空港にもAMDA BANGLAの方が出迎えてくださり、私はやっとホテルに落ち着くことができました。気候、風土、文化、食物とどれをとってもアジアが好きな私のフィーリングにはぴったりで、時間のゆったり流れるコクスバザールでの生活は、私の波長とも合っていて、快いものでした。

一般的に、マスコミ関係者は、難民の悲惨な面のみを強調して、悲劇的に報道しがちだと私は思います。でも実際、ヌルラさんやショウミトロさん達の診療に同行させて頂いてキャンプへ行った時、私はキャンプの人たちが明るく生活しているのを見て、とても強い印象を受けました。救いのない暗い表情がないのは、きっと皆家族や同胞と一緒に、誰もが同じ境遇にいるという安心感と、連帯意識があるからだと思いました。

私の出会った人たちは皆とても穏やかでした。特に子供達は、無邪気で可愛らしく、薬や空缶等手に入るものは何でもおもちゃに変えて遊びます。同じアジアの国からやってきた一人の人間として、私は彼らをととてもいとおしく思いました。

私がしみじみと感じたことの一つは、やはり女性の社会的地位の向上の必要性和、教育の大切さです。例えば、駆虫剤を手渡す時、まず子供達がワーッと押し寄せてきて、それから潮が引くように散らばると、大人の男性が集まってきます。女性達はベールに顔を隠しながらも、控えめに物陰からジッとこちらを見つめており、ほぼ男性の番が終るとおずおずと出てくるのです。宗教や生活習慣の違いもあると思いますが、それでも、子供を産み、育てていく若い母親達が、正しい保健衛生の知識をもって自分達の子供をきちんと教育できる生活、明るく積極的に活動できる社会が、一日も早く来ることを、私は願ってやみません。

AMDAの皆さんの地味で地道な活動をじかに見せていただき、私は深く感動しています。お陰でとても良い体験ができました。看護学生として、今の私には何が出来るか何をなすべきかが少しわかったような気がしています。お世話になった方達に、心から感謝しています。

私達皆が、平和に生活出来る日々が来ることを願うとともに、AMDAの皆様の方々の今後のますますのご健闘とご活躍を心からお祈りしています。

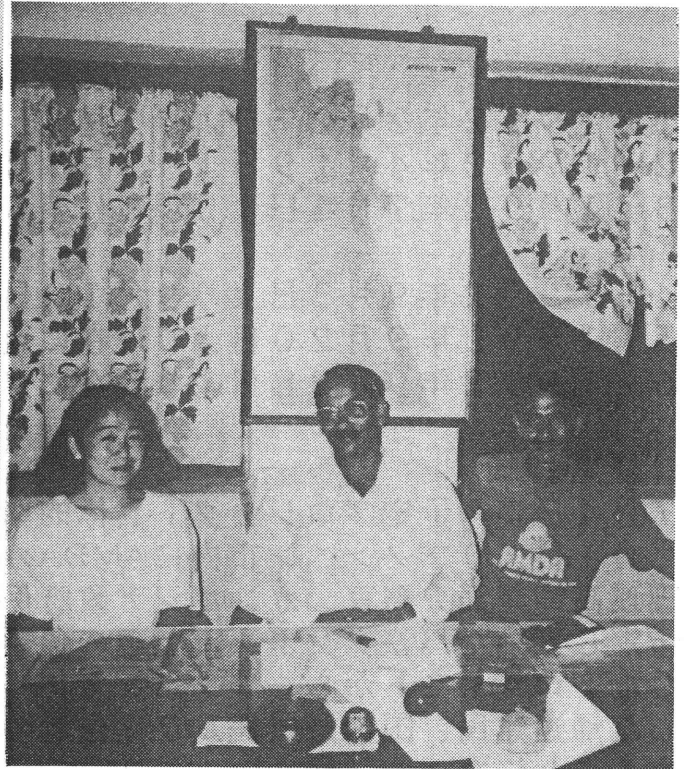
愛と感謝を込めて、

前橋赤十字看護学生 ANSA会員

根岸 まゆみ



キャンプ内でベンガル女性の服装
の根岸氏



シビル サージョンと



イスラム社会では女性には女性が駆虫剤を渡すのがベスト